

平成元年度
(1989)
第29回大会

男子優勝 東海大四 女子優勝 札幌静修

【 専門委員長 寸評 】

男子団体は、東海大四に対して他校がどれだけ肉薄できるかが焦点であったが、決勝戦の相手は、大方の予想どおり札幌岩となった。試合は、数多くの全国大会経験豊富な選手を擁する東海大四に、札幌岩の健闘は力及ばず、東海大四が3年連続3度目の優勝を果たした。

女子団体は、札幌静修と札幌清田の力が抜きん出ており、やはりこの2校が決勝に進出した。シングルスNo.1は札幌清田、シングルスNo.2は札幌静修、ダブルスに勝った方が優勝という戦前の下馬評であった。しかし、シングルスNo.1対決の札幌静修の小畑の頑張りとは札幌清田の金沢の不調が勝敗を分ける結果となり、札幌清田の6年連続優勝の夢は消えた。札幌静修は9年ぶり11回目の優勝である。

男子個人戦の興味は、東海大四のレギュラー選手に対して、市川・塩田（札幌岩）、相木（旭川東）がどこまで食い下がるかに集まった。しかし東海大四勢の力は他を遙かに凌駕しており、特に伊佐治（東海大四）の強さは圧倒的であった。結局、全国大会への出場権は東海大四勢が単複を独占した。

女子個人戦は、男子と同様に金沢（札幌清田）に対して、小畑・伊藤（札幌静修）がどこまで頑張れるかが楽しみであったが、大方の予想どおりシングルスは金沢（札幌清田）、ダブルスは小畑・伊藤（札幌静修）が優勝を飾った。

今大会、全国大会への出場権を得た学校・選手は、例年になくレベルが高く、全国に通用する力を十分に持っていると思う。男子はベスト4、女子はベスト8入賞を目指して健闘してほしいものである。また、男子の市川（札幌岩）、小野寺（東海大四）は2年生、女子の小畑、伊藤（札幌静修）は1年生であり、更に来年以降の活躍にも期待したいものである。

最後に、今大会で急遽当番校を引き受けていただいた千歳北陽高校の職員、補助役員の生徒諸君に、心から感謝し、お礼申し上げるものである。

【全国大会】

男子団体第16シードの東海大四は、期待どおりの活躍を見せてくれた。特に、準々決勝の対・堀越（東京）戦は、敗れはしたものの相手をひやりとさせる場面がいくつもあった。やはりベスト4の壁は厚く、ベスト8に留まったが、堂々とした戦いぶりであった。

女子団体の札幌静修は順当に勝ち進み、ベスト8入りを賭けた対・四日市工（三重）戦は、シングルスNo.2までもつれて、一時はゲームカウント5-1でリードした。ところがここで雨脚が強まって試合は中断。翌日再開された試合では、前日の流れがすっかり変わってしまい、逆転負けという結果に終わってしまった。1年生主体のチームでもあり、若さが出てしまったのか、誠に残念であった。この悔しさをよい経験として、今後の成長につなげてほしいものである。

（ 専門委員長 緒方 寿人 ）

優勝のよろこび

男子 東海大学第四高等学校

我々東海大四硬式庭球部は、今年、3年連続3回目の優勝ができました。部が創設されて3年目の今年は、過去2回の全道優勝の感動を再び勝ち取って全国大会に出場することを目指して頑張ってきました。そして、その目標を達成することができたのです。

昨年からの課題は「自分のペースを崩さず、いつも安定したプレーをして実力を出し切る」ということでした。そのために、冬の間も練習や試合、トレーニングなどを重ねてこの大会に向けて努力してきましたのです。

今回の決勝戦は、過去2年とも決勝で対戦している藻岩高校が相手でした。相手が藻岩高校であるだけに、我々は気を引き締めてコートに向かいました。ダブルスでは立ち上がりの2、3ゲームで苦戦しましたが、そこからはペースを取り戻し6-3で勝利。シングルス1も苦戦しましたが、6-4で勝ち、結局2-0で優勝することができました。

この大会で、自分のペースを守って力を出し切り、満足のゆく試合ができたのは、冬の間をつらい練習があったからだと思います。そして、先生やコーチのご指導のおかげだと思います。この優勝によって、我々は、目標を持つことの大切さや、努力することの大切さを学びました。そして勝つということの重大さ、つまり勝つことによって手にする喜びを知ることができました。

（ 東海大学第四高校 主将 藤沢 剛 ）

優勝のよろこび

女子 札幌静修高等学校

私たち札幌静修高校のテニス部員は総勢14名。しかし、その中から団体戦メンバーの6人が選ばれます。テニス歴5～7年という1年生も3名いますから、校内でのメンバー決めの試合はたいへん厳しいものでした。そうやって選ばれた1年生3名、3年生3名の

レギュラーで、私たちは5月29日からのインターハイ札幌地区予選に出場し、優勝することができたのです。地区予選とは言っても、実質的には全道第1位を決めるものでしたから、気の抜けない、重たいプレッシャーのかかった試合になりました。

6月21日22日に行われた全道大会でも、決勝戦の相手は札幌清田高校でした。自信はありました。しかし地区大会とは少し違ったプレッシャーと違和感もありました。試合に出る選手はテニスコートで、選手になれなかった者は応援席で精一杯頑張ろうと、チームは一つにまとまることができた結果としての2-0の勝利は、そんなチームワークのおかげだと思います。そして札幌静修高校は、11回目の全道優勝を成し遂げ、最多記録を更新しました。

8月1日からのインターハイは愛媛県松山市で開催され、そこに私たちは北海道代表として参加しました。ベスト8が目標でしたが、もう一步というところでベスト16（3回戦敗退）に終わりましたが、みんな自分の持っている力を十分に発揮したので悔いはありません。

地区大会から全国大会までの道のりは長く辛いものでしたが、部員全員で頑張れたことを、今はたいへん誇りに思います。そして、顧問の先生、そして両親に深く感謝しています。

(札幌静修高校 主将 狭間 聖子)

全国高校総体（第79回全国高等学校庭球選手権大会） 愛媛

8月1日～8日

愛媛県総合運動公園庭球場

男子 個人戦シングルス	優勝	増田健太郎（堀越）
女子 個人戦シングルス	優勝	沢松奈生子（夙川学院）
	準優勝	平木 理化（共栄学園）